

「しーちゃん来たよー」

と、『関係者以外立入禁止』と書かれた戸を開ける。すると中から、いらつしやいの声と共に、ほんのりと酔の香りがただよってくる。大きな調理台の上には、色とりどりの具材を巻いた手巻き寿司が、きれいに並べられている。私は、この光景と、関係者以外立入禁止と書かれている所に入っただけ、特別感が大好きだ。

『しーちゃん』とは、石川県に住んでいる大好きなおばあちゃんだ。しーちゃんは、私が幼い頃から、冠婚葬祭用のパーティ寿司を注文を受けたら作り、会場に届ける仕事をしている。何年前までは、小松空港で毎年行われている航空祭でも、手作りのお寿司を販売していた。その時は、親戚たちと混ざり、私も小さいエプロンを付けて店を手伝ったのを覚えている。そんなしーちゃんは、仕事をしている時も、休日の時も、いつも明るくて、いつも私を笑わせてくれる、とても面白い人だ。たまに、仕事がない休日のお昼には、小さなお寿司屋さんを開いてくれる。いとこと私がテーブルの前に座り、その目の前でしーちゃんがお寿司を握ってくれるのだ。少ないネタの中から私が

「イクラひとつください！」

と言うと、

「はい！イクラひとつね〜」

と言って、イクラを握ってくれる。一つ一つ丁寧に握ってくれるお寿司は絶品だ。

しかし、ここ最近しーちゃんの足が悪くなり、注文の電話があまり鳴らなくなってしまった。私だけでなく、家族全員が心配し、何か自分にできることがないかと考えたりもした。手伝う時はいつも、お寿司をパックの中に並べたり、車に積みこんだりと様々だ。大勢のお客さんにお寿司を作るため、時間がかかるのももちろんで、ずっと立ちっぱなしの作業なので体力もかなり必要になる。たまに手伝いに来る私でもとても大変なのに、しーちゃんはこの、作っては配達するという作業を文句も言わずやり続けている。それどころか、いつもニコニコ笑顔が絶えず、できたての特製酢飯を「味見します。」と言って、つまみ食いもさせてくれる。

なぜそこまでして、お寿司を作り続けているのが最近分かった。それは、私としーちゃん二人で、お得意様のパーティー会場にお寿司を配達した時だった。足の悪いしーちゃんに替わり、私が台車にお寿司を乗せて、会場の裏から運び入れた。運び入れる際は厨房を通るのだが、そこには調理をする多くの方がおり、挨拶をしながら進むと、たくさんの方に話しかけられる。

「あら、お孫さん!?!大きくなったねー。」

と言われたり、

「これからおばあちゃんのお手伝い、よろしくね。」

と言われたりする。時には、

「もう、おばあちゃんの寿司は絶品や。今度寿司の作り方教えてもらいます。」

というように、自分にとつても、しーちゃんにとつてもとても嬉しい言葉がもらえる。その言葉を聞いて私は思った。しーちゃんは、こんなにもたくさんの人に、こんなにも嬉しい言葉をもらっている。支えてもらっているからこそ、この仕事を楽しく続けていられるのだと。例え足が悪くても、自分の作ったお寿司を美味しく食べてくれる人を見るだけで幸せになるのだと私は感じた。それに、しーちゃんと配達に行くたびに多くの人と話ができるため、交流もでき、人見知りの私だけでも少しずつ克服することもできた。多くの人と交流できるのは、この仕事をやっているからこそだ。

しーちゃんの作るお寿司の中に、「おはな畑」という名のお寿司がある。その名の通り、手巻き寿司を丸く並べて、まるで大きな花が咲いているようなパーティー寿司だ。私はこのお寿司が一番お気に入りだ、とてもきれいだ。お寿司を使って花を作ることができることも驚いた。こんなふうに、ただお寿司を並べるだけでなく、お客さんを楽しませるようなお寿司を作るのがしーちゃんだ。そしてこれからも、お客さんに喜んでもらえるようなお寿司を作り続けてほしい。今日も空っぽの器が返ってきますように。